

大阪府立母子保健総合医療センターにおける  
母子感染実態調査

末原 則幸

要約 大阪府立母子保健総合医療センターにおける母子感染の実態を調査した。1992年GBSは妊婦の7.03%に HBSは0.76% HBEは0.53%であった。1991-1992年の間に 新生児のGBS感染は5例、CMV感染は4例、先天梅毒は1例あった

見出し語：母子感染、 実態調査

研究方法

1989年-1991年の間に当院で出産した妊婦5080人の感染症合併について昨年報告したが 今年は1992年に当院で出産した1706人と1991年および1992年に当院で出生した新生児の感染症について調査した。また母児感染防止の立場から、妊婦に対する感染症スクリーニングの項目を拡大した。

当センターでは妊婦全員に対しておこなっている感染症検査は 梅毒血清反応 B型肝炎

(HBs)抗原 風疹IgM抗体 および陰GBS培養検査である。その他の感染症 例えば水痘 ヘルペス クラミジア、トキソプラズマ、サイトメガロウイルス リンゴ病などの抗体検査は妊婦全員ではなくそれぞれ必要に応じ行っている。

なお、1993年より全妊婦のうち、書面によるインフォームドコンセントが得られた妊婦に対し C型肝炎抗体 HIV抗体 ATL A抗体のスクリーニング検査をもあわせて行っている。

大阪府立母子保健総合医療センター産科

## 結果

### (1) 妊婦の感染症

1992年に当院で出産した妊婦のスクリーニングで陽性者の頻度が高いものはGBS 120人7.03%、HBs抗原陽性者(HBe抗原が陰性のもの)13人0.76% HBe抗原陽性者9人0.53%であった。なお 全員にたいするスクリーニング検査は行っていないが口唇ヘルペス合併9人0.53% クラミジア抗原陽性7人0.41%などであった(表1)。

### (2) 院内出生新生児の感染症(表2, 3)

院内出生児で母児感染によると考えられるものとしてGBS感染症は1991年に3例, うち1例は妊娠25週で出生し, 新生児死亡であった。1992年にも2例あり, うち1例はやはり緊急母体搬送症例で妊娠24週で出生し, 生後0日死亡であった。

サイトメガロウイルス(CMV)感染は1991年に3例あり, 妊娠24週での出生で新生児死亡になっている。なお この他に3例の子宮内胎児死亡例があった。

1992年には妊娠29週で出生し, 生後4ヶ月で死亡した1例があった。この症例の母は腎移植後で免疫抑制剤を使用しており, また輸血の既往もあり, CVM抗体は陽性であった。

1991年のHB陽性の4例は新生児の予防措置を行ったにもかかわらず全例キャリア化した。1992年の1例は乳児肝炎発症したが治療により改善した

1992年の新生児梅毒は妊娠初期の検査を行っていたにもかかわらず, 確認されておらず,

分娩直前に母体搬送され, 出生児は特有の症状を呈していた

1992年には分娩約1週間前に妊婦が水痘を発症し,  $\gamma$ グロブリン治療, 抗ウイルス治療を行った 児への感染が疑われたが明かな水泡などは認められなかった。

なおクラミジア HCV感染は把握できなかった

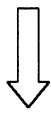
### (3) 妊婦の感染症スクリーニング項目拡大

当センターでは妊婦全員に対しておこなっている感染症検査は 梅毒血清反応 B型肝炎(HBs)抗原 風疹IgM抗体 および腫GBS培養検査である。

当センターは医学的また社会的ハイリスク妊婦を多く抱え, 緊急母体搬送を多く扱うという特殊性から, かねてより HIV抗体 ATLAのスクリーニング検査ができるよう院内外のい関係者と協議を行ってきた。このたび HIV抗体 ATLAのスクリーニング検査を含む 妊婦のスクリーニング検査に関する説明文と承諾書を作成した。1993年3月より全妊婦のうち, 書面によるインフォームド Consentが得られた妊婦に対し 梅毒血清反応 B型肝炎(HBs)抗原 風疹IgM抗体に加えて C型肝炎抗体 HIV抗体 ATLAのスクリーニング検査をもあわせて行うようになった。



**検索用テキスト** OCR(光学的文字認識)ソフト使用  
論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



要約 大阪府立母子保健総合医療センターにおける母子感染の実態を調査した。1992 年 GBS は妊婦の 7.03%に HBS は 0.76% HBE は 0.53%であった。1991-1992 年の間に新生児の GBS 感染は 5 例、CMV 感染は 4 例、先天梅毒は 1 例あった。